

人はなぜ学ぶのか 8

～なぜ勉強・学習しないといけないのか～

敷津小学校 原 雅史



原 ひろ子さんが、このヘヤー・インディアンと一緒に暮らしていて、最も驚いたことの一つに、日本では当たり前に行われていることが、全くされていないことがあります。それは、単純にそのような行動が無いのではなく、その行為を示す言葉すら無いのです。何が無いのでしょうか。ヒントは学校が無いということです。

ヘヤー・インディアンの子どもは、4歳ぐらいから自分の食料は自分で見つけなければなりません。まず、自分用の釣り竿、ナイフなどをつくり、外に出かけるための服や靴をつくり、父や母、兄や姉にくっついて行って、うさぎやヘラジカをとるところを観察します。まず、どこにいけばうさぎがたくさんいるのか。つかまえるためのワナはどうやってつくるのか。人間のおいがするとウサギはワナにかからないので、どうやって人間のおいを消すのか。ヘヤー・インディアンの子どもは、これらの仕事をじーっとよく見ています。騒いだりおしゃべりすると大事なところを見逃すので、だれも話しません。(そんなことしたら、獲物に逃げられてしまいます)

また、原 ひろ子先生ヘヤーの子どもたちに、一緒に暮らしてくれたお礼に折り紙の鶴を折ってあげたことがあります。(折り紙は、日本特有の文化で、外国の人には大変喜ばれます)

案の定、子どもたちは目を丸くして、一枚の紙から鶴が折られていく様を見ています。すると「もう一つ折ってくれ」と何度も言うのです。何羽も折っているうちに「紙ちょうだい」と言って自分で一生懸命に折り始めるのです。

けっして「初めにどうするの」とか「もっとゆっくり折って」「これでいい？」とも言わないのです。そして、見よう見まねで、何とか鶴を折りあげて「できた!」と見せにきます。たくさん折ったあと、「ほかに何かつくれるか?」と聞いてきます。「こんどはちがったものを教えてよ。」とは決して言いません。

さて、最初にお話した「日本では当たり前に行われていることが、全くされていないことがあります。それは何でしょう?」の答えはわかりましたか?

そう、ヘヤー・インディアンには「教える」という行為がないのです。それどころか「教える」という単語そのものがヘヤー語にはないのです。だから、原 ひろ子先生が弓矢をつくっている女の子に「それ、上手ね。だれに教えてもらったの?」と聞いても意味が通じません。そこで「弓矢のつくりかたを、どうやっておぼえたの?」と聞くと、「自分ひとりでおぼえた!」と女の子が答えたそうです。

だから、自分の食料を見つけるために、父・母にくっついて狩に行っても、あーしなさい、こうしなさいと誰も教えてくれません。じゃあ、どうやって狩の仕方を覚えるのか。見て覚えるしかないのです。大人の会話を聞いてコツを覚えるしかないのです。

折り鶴を初めて、自分でもしてみたいとおもっても「教えて」という単語がないので、「もう一度折って」とたのんで、とにかくよく見て覚えるしかないのです。これが、ヘヤー・インディアンが「学ぶ」という行為です。

この本を読んで、校長先生は、こんな学び方もあるのかという驚きと、ひよっとしたら、本当の「学び」というのはこういうことではないだろうかとも思いました。

つまり、「教える」「教わる」という行為や言葉はないのですが、「学び」はなりたつのだということです。そして学校という文化のないヘヤー・インディアンの子どもですが「学ぶ」ことは十分にできるのです。

もし、彼らに「なぜ学ぶのですか」とたずねたら、「生きるため」「自分が生きのびていくためには、学ぶしかないよ。」と答えるのではないかと思いました。

(つづきはまた次回にお話します)